

十燕
種石
林鹿
の花

六輯
参

イ管
679
56



679
56



燕石十種第六輯卷三

麓の花

書城よみて倦きおしやがきよなりいねて抱り
ほろびといひし人よををさくおとすまし
ゆもつることをこのゆる好問堂主人をさすひまよ
おしと書け虫もひまをてやとけきれまぞ
うちとけありあるふその中ゆ城おのれむと書
りて飛りけさ色ハつるのゆらここハるよ人に
んをさき書るあはれといひつよまどよひららそ

さき雨ハ心川よりちんたぶる雲此くしたもふく
空ぬをそ阿蘇一丈原のそ立はらぬてつちさく
はくこのあはれ此あつさハ例乃さび野のそほとけ乃
とどがりむらう勢あふ年ハ日そりかちよきせささび
ごとよひのーたもとこり水をむられあといふ
みことまいとものうくとあを蚊のせせほも中
鐘さびらちきりて短もをーとおひらふめ
思ひよきることおもあつたふあひのやうにうたつや
たりのうー何きハあいそふくふいれをーあいで

たさみそあつどゆそあまかくしつさ哉せちち
んむともぬいささつさうがこれその名をーそ
はあうーうまーつぱんせまーとまーいあをきあうり
とまきさくまねそまうーとまうーとそこりてゆけハ
かうぐ乃らまうーきことよまうーサのうー^{ハチ}あうりあ
さうどれりのーつるとるせよるけむくまをあん
おるゆるくのあ書よさく富つさバ読よける鬼イ
をあう種め杖さやうつあまをわーかか新をさびる
みうー地乃心口あうーそあかあうーとけりりて

尋常といひかひ千本此苑ありて乃いと
おほくも思ふ所しさまいこれふその名紙しと
なぐそふりやのふとよびそんるあま下れん
かたあつりやあつりや

文政二年六月

池橋躬

しる

林鹿乃花卷之上目次

奥列五節風俗

壬生狂言の繪

濱弓

憲法染

友禅染

車戸棚

三ツ指

あしで繪

さざり繪

百万遍

葛西念佛

竹々亟寺

不忍辨天

麓の花巻上

江戸下谷

好問堂主人著

陸奥國の五節風俗

もふてとようくふつけ遠き國より古への事も傳りし
質朴なるををるれはと知て〜東国旅行談 卷の三曰
出羽国庄内領の町家在々古風の作法あり往昔を
日本國中よりかくれしとくめをあら〜とや又節句も
み三方を用ゆる事あり正月を橙子草餅藻湯草根松
藪相子芝朶喰積臺らんあり當所の海を海老ふし
寒國ゆへ蜜柑もる〜三月より桃の花と草の餅を積合を
五月ハ粽を三方の内へのるるゆより〜らて五ツつ把て載る七月

七日ハ梶の葉をとりて素麺をのこす九月ハ菊の花は餘あり
 うこの如く家内より鴉龜松竹まき齋をすゝあとの目おぼやとやを
 係るる暖簾を中の間二間三間さうりのあいにみうけてる代府
 上下を著しそまへ座一件の三方を禮者のまへよせし礼を
 うらるまゝ正月十日より大なる木の枝は梨子を結付て圍爐裏の
 とぶくぐりおき十五日はあけてこれを叩おとて祝儀とを是又親
 成就の祭とや余このこせびりて友人堀尚平よりうらうら尚平
 ぬく奥別南部の産ありこの國よとこの事ありとさんと
 少づのりりめりて七月梶の葉は素麺をりてみまうい瓜を
 りるとりりこれよとあらははのよ始てあり一客のい必と平益
 米とごまめと以乃せ祝儀とをたのむ

壬生狂言の繪

みふ狂言の繪
 帝堂 茅小見布
 さつろしお實
 政庚戌の年
 けやうそ菊帳
 の時繪本を
 うまうらうし
 す



如問堂藏

破魔弓

今正月弓の破りて何と云ふもぬ弓といふりあり 世語問答
卷の上曰孝徳天皇の御宇に正月に弓をいさくむらまると
も重尤の眼と名付てこまをいさくまむらり 滑稽雜談

卷の二曰或説云然れハ正月射戯を濱弓ハ重尤の眼を射破る義ハ其ハ実を
破目弓あるハ一通唱乃宜き事なりて濱弓ハ重尤と稱をこの説破目義終るハ
今ハ世よたえを重尤を射るにぎたてり 俳諧五節句 貞享五年
印本内田

頃也 曰吾妻乃方此子共細繩をまらぬと一打時破たま
いさく声をつけ打破た夫めて左右に立別れ玉を射とあるも
を搦とを都と昔を射とあり大路禊者乃足もとく
矢を射りつるゆゑ玉をよけり棒竹帚乳切木ぶりてこれ
りのを持こむるあり當時破た有て玉を射を越亦も玉をこ免
るありしとまよてそのおもむき法もあり今もこのまを

思ハ あつと追 寛文七年 印本 卷の上のせしむるを抄寫してのす五節句

ふりてると合せ考へて 射るを 世語問答 日本歳時記



憲法抄

明暦万治乃以京西ノ洞院四条吉岡憲房といふ者始て抄る
吉岡抄ともいふ人劔術を得り一流を究め門外無双

あり房を法よあつたの實名を以て法名とをといふは世々
あとの説をりてあつりとをいふ

毛吹草

寛永印 卷の四山
十五年本

城名物をいへる条曰吉岡染憲法染とあり

薬師通夜物語

寛永十
五年本

あらずやさや羽二重をらんがう染は教をいへるこのふつりの證を

りて是へ寛永の既憲法といふ名あつたりを明暦の始ん

るといふ説乃むが中をあらう

通言便蒙抄

卷の中彩色

門曰憲法染黒茶のこと也近頃憲法吉岡とて兵衛をりて

世の鳴りし者有此人始て染せしむる黒茶を憲法染とを

吉岡染ともいひあつたりとありし世のいふ説の如くあつた

吉岡憲法とをいふをさいとげらるる実名及法をいふ

ざら余らふたわて黒川道祐の説をりて定説とをいふ

雍州府志 卷之七土産門下曰吉岡染吉岡氏始て染黒茶故

謂吉岡染倭俗毎夏如法行之稱憲法斯染家吉岡祖每

車如此故世稱憲法この説憲法をりて異名とをいふ

わびやうめり俗説乃むが中をあらう

友禪染

今世の流行る染は友禪づりといふ草花あつた彩色せむをいふ

昔よりの説は友禪を繪師ありけり書く所を写し染る

あり志墨繪ふり染るも有あつたりとされど友禪染といふ

る草花の類を丸くしたるもの

女車室記

卷の一染やうること

をいへる条曰中頃の吉長の小色その友禪染の丸はくし

伊勢

家雜記 卷の二曰ゆぜん染とて竹を丸く或は梅が枝をいふ

りて模極とするゆぜんとあつたりんりき画師が書を

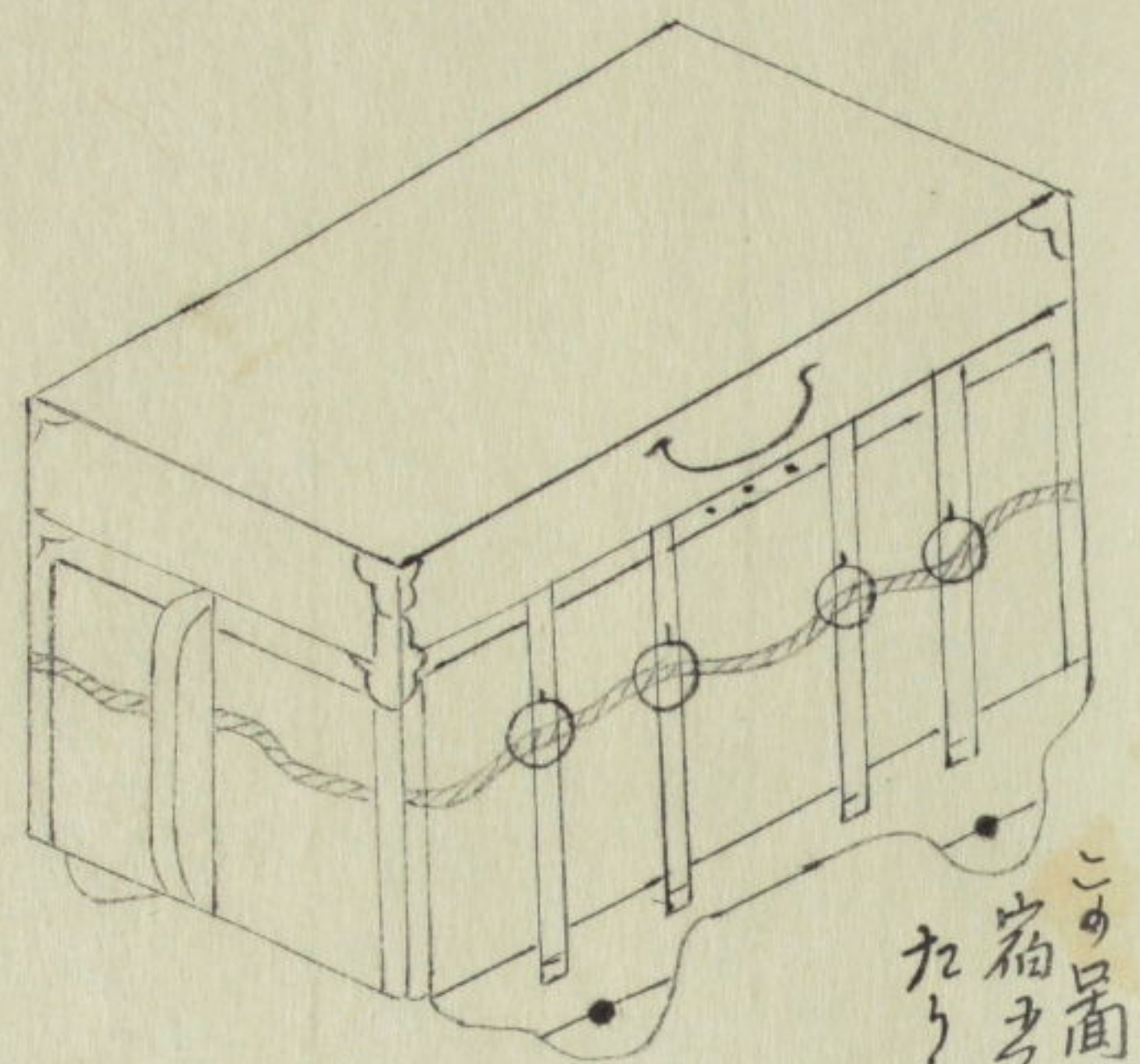
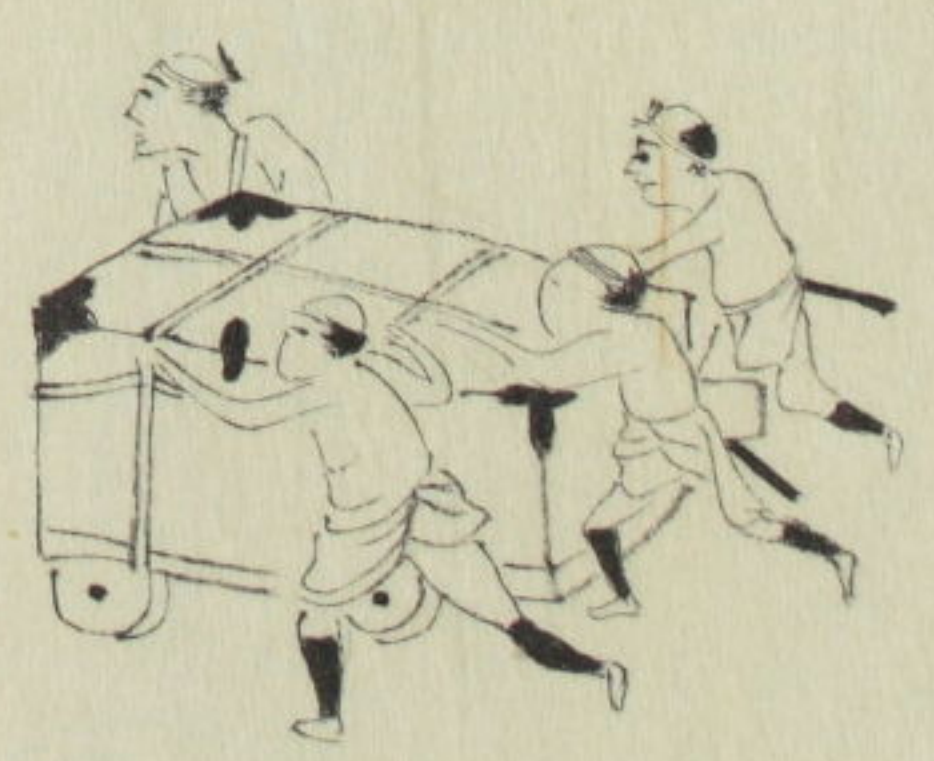
染るを衣服のりやうとてゆぜん染とりなりしこれの文

ゆて友禪の丸もやうあることあるが、貞享四年女用訓蒙圖彙
 巻の四は丸りやうくまぐを載しりそのまねをばつんて

車戸棚

天正より以来明曆乃らゆまを都鄙とも車長持といふ
 を家くは備て非常の具のあつりそのかゝりやよのまねを
 見てあつて一余こつて
 文政二年四月より乃
 御山へまうて一きり古河
 とつらうまのきせある
 家の車長持ありまは
 あつりんつりしきうら
 ありて今世のつてな
 のそ

むさしあぶと
 万治四年
 印本 野載
 車長持の圖



こも面古の
 宿を具
 たうしもの

ら世をへづりの器もれを送りあるものあり

又車戸棚といふもの
 これも同一を日光街
 道石橋宿といふるなほ
 乃桑店にあるがんつり
 世世人乃さるものあり
 ありともれあるこれ
 その圖を模してな
 并せ見るとさうか
 いあ

車戸棚の圖

大きさを

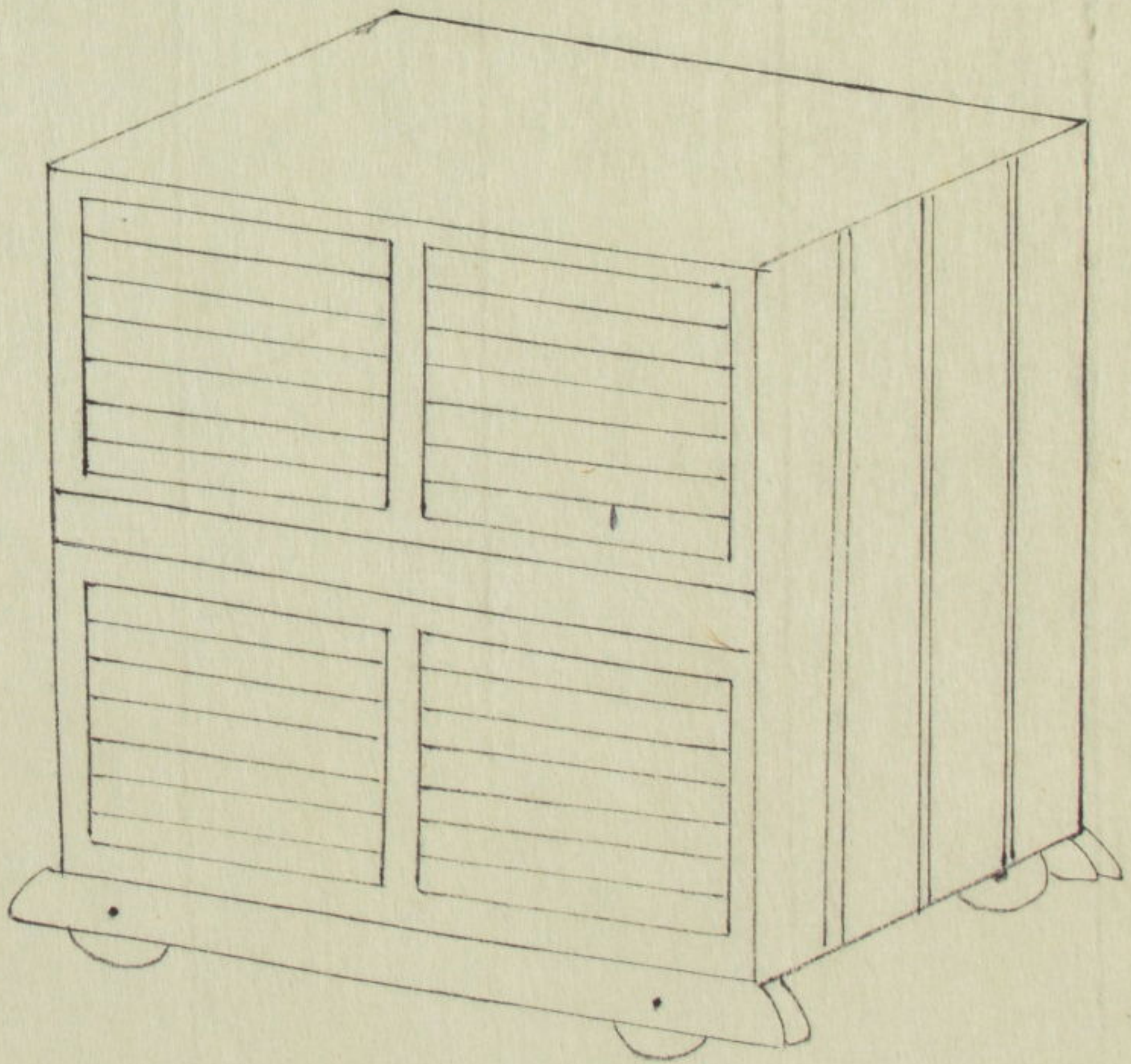
常た戸たあ

のりき

あーいせを骨

ほくりほ

たらしめせ



三つゆび

艸堂雜錄

享保十四年印本
苜芻光謙著

墨一黒誰

守志

莫學

賓主相見

初

卷舌

三指

大張臂

此三者並
東武風俗

この詩意めてハ無礼のるハ三指といひハ指を引くと

まきみのあふともふらりあせーりのハ

りらふ

迹追

卷の四ハ元日雨ふ

はく指と三りのちハ礼儀う耶

篋櫃輪 卷の
曰んせ男老三ッ指
でつらひくた
冠角
といふるの

ふるくを

きのつらふの物

の喜寛永
の頃のハ

卷の下めもるの今も

老人乃三指つき合ふるといふとあり

あーで繪

遠碧軒記

卷の下曰古代の硯箱あやまらるる古歌の躰を詩繪
よのま歌を大低うたて画よあることハ繪めるとせうぬ

法をあらゝるべきと云ふ又 **結駝録** 中北巻ゆもあらゝる二奇繪といふ

正繪と文字ヲ雅へテ書クナリ」中にもつゝあり あての事名目をふりて

世敵びしりれりも所らんこれ近き世の事のももろしりてをむねとをまひあを
たをあらゝる事ゆへに之ととれをこれを後よりいふ事なり繪のこれありて
ふりうのれきとゆへすもたれ乃料ゆり **うつが物語** **源氏物語** **續世継物語**
そのふらりてんたるをいへり

今物語 **塵添燼囊抄** **拾芥集** **全生集** **中務集** **尺素往來** ちや

ゆも見えしり

この圖 **五月兩日記** に見えしり
香の奥ありこれ記れ奥書み文明
十一年五月十二日於東山殿執行之
と云ふ

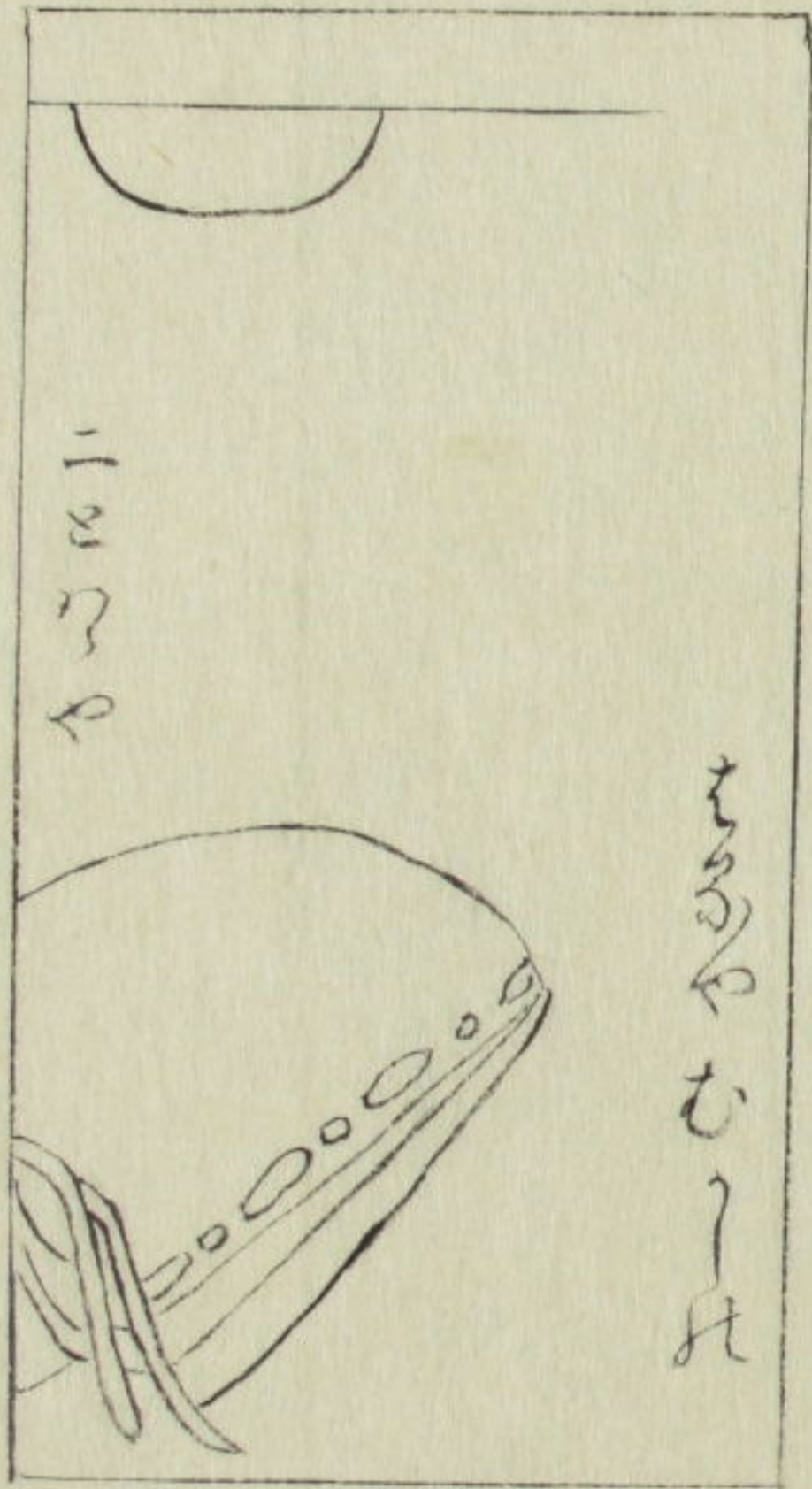
桐のまもろきけりあり
よりのうけりす人をあらゝる
あふりんとこいふ歌をりてあらゝる



一番

梅花をぐ細糸きし白いぎと喜やむしれ

月をとりやといふ奇歌りてあらゝる



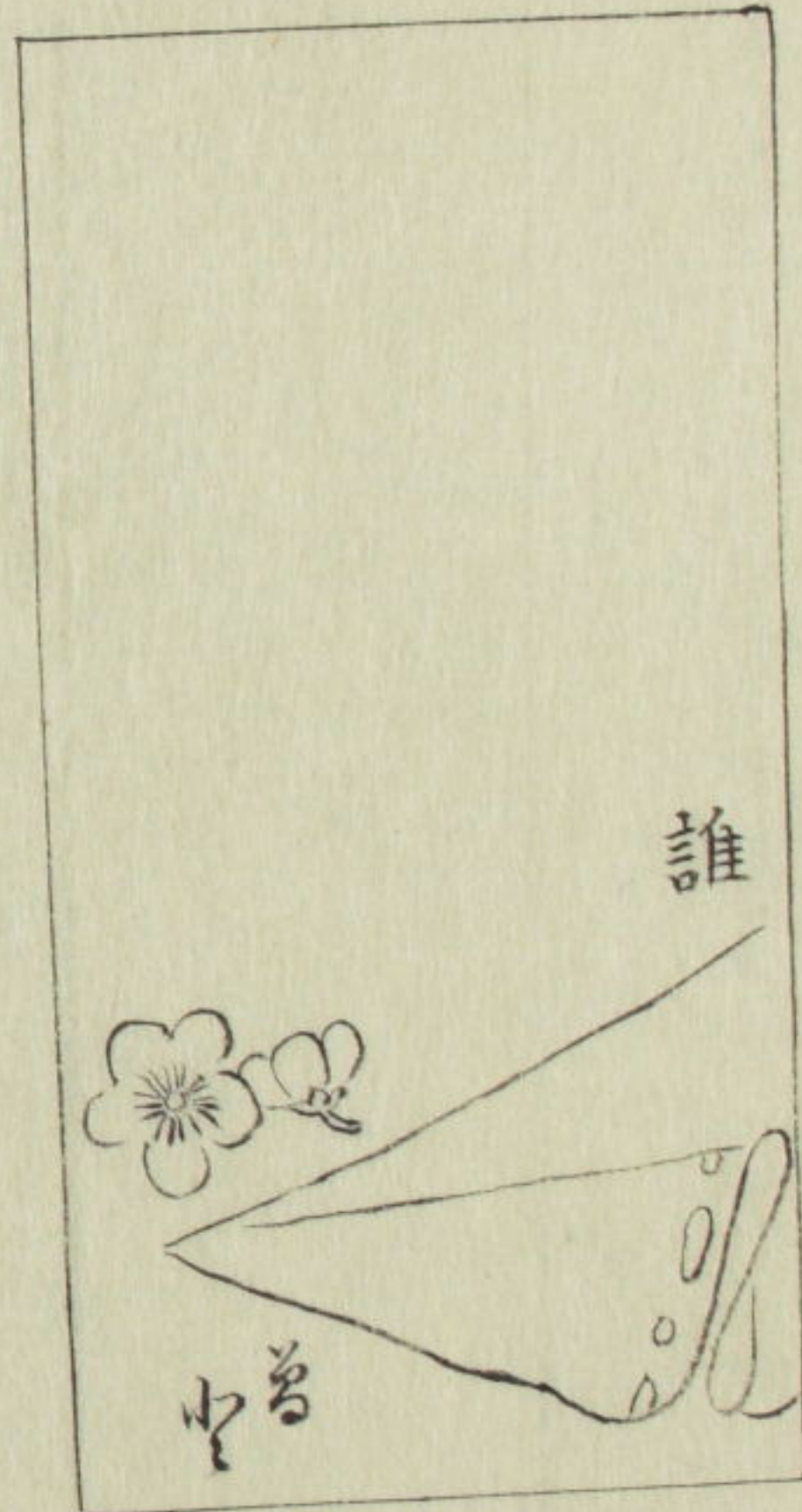
ちやむしれ

二つ



右
 あいひき乃ふはくく戸を何處をよて我まの
 人を誰かやと心す我もさ
 あてみうけり

裏



北島随筆 卷の二

はあてのふりきり
糸日友原貞幹
所藏のうらこを
備よるをいざり
今そのひとりを
のをこれあての
変體ともいふ
ものめや



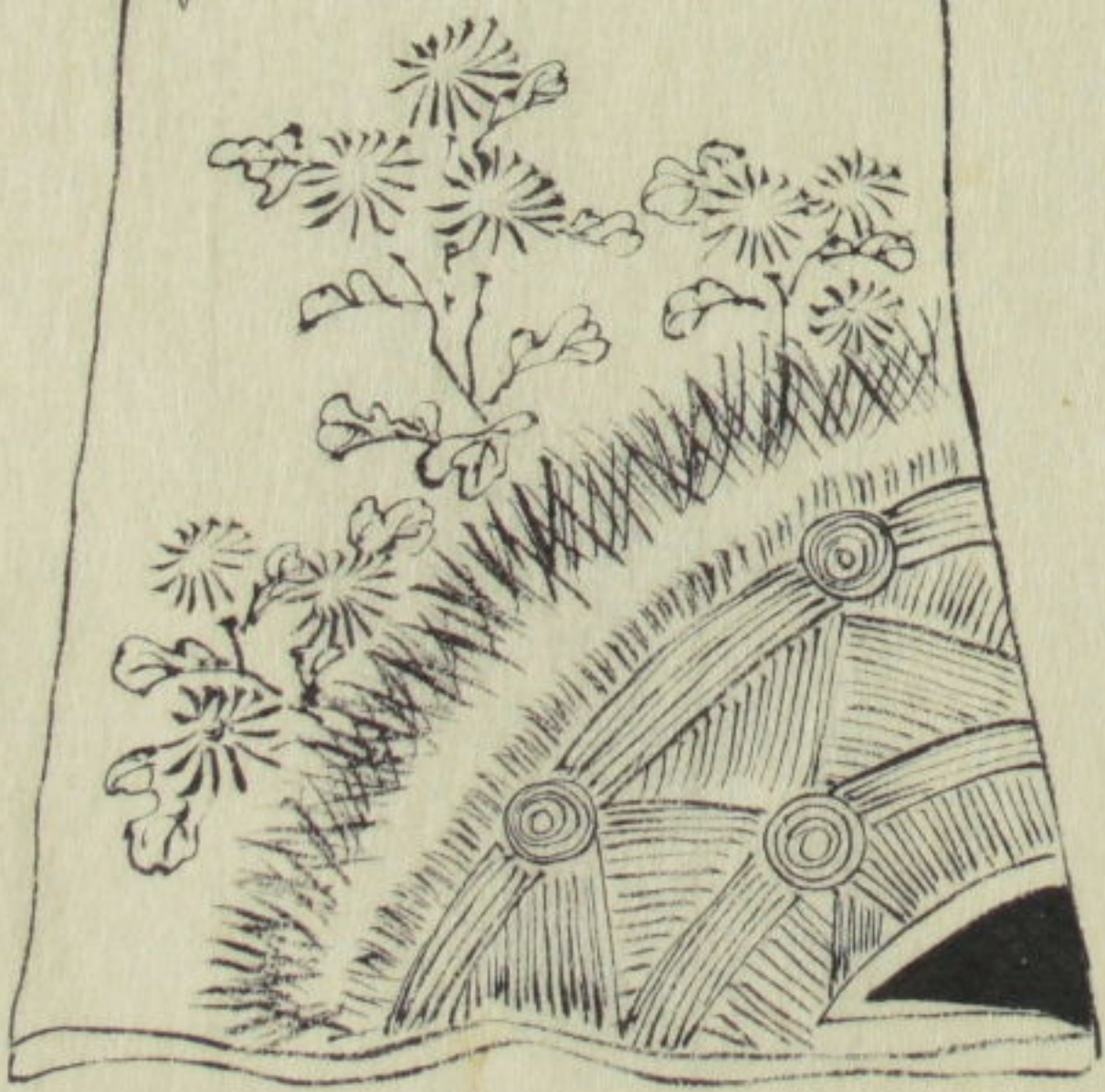
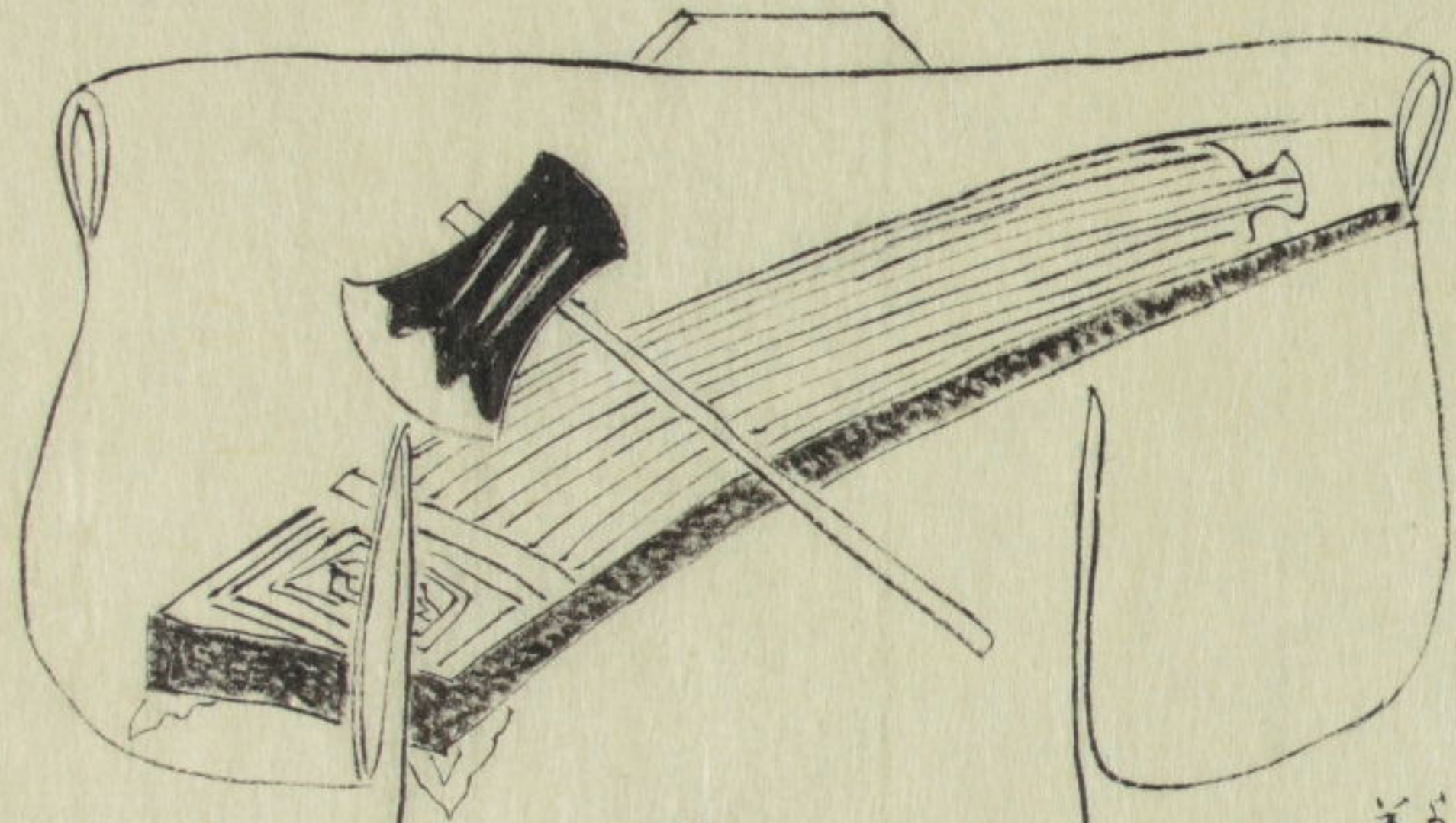
いまあをたところれ思どもをりてあてのさぬ瓜かりて

さゆの繪

遠碧軒記

卷のト曰安土の惣見寺佛殿の繪馬は男子が
棒をたてて櫓を傍はすておきて箕を片ふふりちて傍小蚊帳を
はりたる躰狩野永徳う画ありこれハ信長と津好めて氣を直よ
すれをさてうをげハ身を持と云をさゆり繪は衣作竹環巻圖あり
此圖のうらこ世の傳いりりあきとらふさとり繪といふ名乃らぬを
所藏するはまのせだ
ありーろー今も世よりてそやを鎌輪ぬといふりりのと明暦
の凡りろろ敬びーりのあり是さとり繪といひて

物 杖 菊 柴垣 琴 斧



女用訓蒙畫彙

貞享四年 卯木

この畚ハ斧と琴と菊をうきて
善事を聞といふことよ
うあらせしり

狂言記 所載



水鳥記 所載

江戸板木の 年号あり



盤とて文字
うきうきハ
飲みしる
こと

因よりいふことそれらうりたることあると今もゆりハ
 倉の戯を咄よ筆の状をやること馬の事としてことより
 せしあやういふことよりいふことより馬の事として
 盲ある人ゆりけをの相あやうこと紙をひろげしれり
 書をにつけいふことよりいふことより馬の事として
 書て是を御借いふことよりいふことより馬の事として
 づきゆりけをり勢といふことより馬の事として
 を書ていふことよりいふことより馬の事として
 是れをよぶいふことよりいふことより馬の事として
 橋こはあやういふことよりいふことより馬の事として
 つきて覺と一十二月廿日いふことより馬の事として
 けせ借る人のいふことよりいふことより馬の事として

曾呂狂歌咄

卷の一日唐

醒睡笑

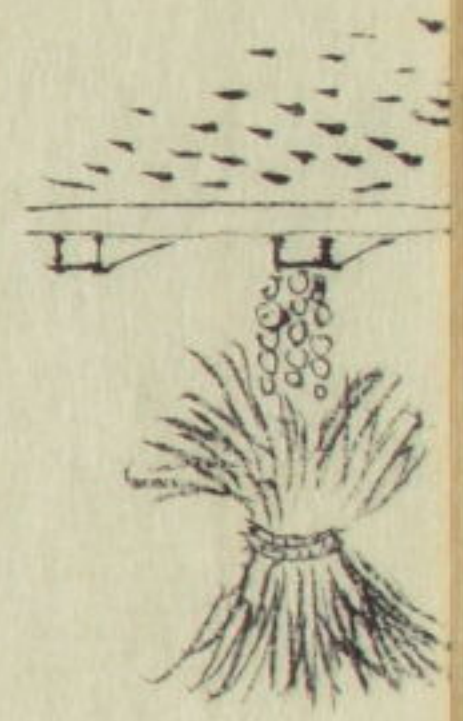
卷の上曰文

有極色々ある中馬の形是の関へ人のうらをさへ入て咄つき
 居る下あり是のいふ事とことより馬の事として
 事也馬乃僕をらふことより又九席といふことより
 うを讀る馬九席と又九席といふことより馬の事として
 覺二九席



曾呂狂歌咄 所載

酒をやるの苗を
 ありといふこと
 又二九席あり



百万遍念佛

世は百万遍として先妣の年田あらは祖師の忌日かよふことのいづを
いとむむ事 謠曲道明寺 念佛百万遍りはは往生疑ひある

まきあとしるるをえのあふ後醍醐帝乃元弘元年七月の
疫病のちやるをりよりころまき始りしつゝひびく事あり

選擇疑集 曰道掉云須依小阿弥陀經一七日相續無間念
名号若滿一百遍以得往生云々いとふくく 榮花物語 玉のか
ざりの巻曰とくころもいと道心かきましく百万遍乃はねん佛

あやつ福よせしとあまき布引めたき乃巻めもるのそのい
此いともふくくよりあまきをかんてりいと皇仏の国よりを
らるりのとくんのそ 木槌經 曰若復滿一百万遍者當得
断除百八結業とんえふをこれめてありし

葛西念佛

近代世事談綺巻の五曰葛西の土人鉦大鼓小笛をまどて躍
念佛少て江戸の大踏の徘徊を是を葛西念佛といふ泡齋と
呼ぶ寛永乃ころ泡齋と云程人の法師ありて町小路を走る人
登あつまり事遠く泡齋と云をきり今ぬくく事ありて
氣遠の名目となきり此泡齋と云されて躍るる事異形ありて
人の笑をかきぬしむの葛西念佛が躍る一極ありず左へ飛あり
夜をゆるる頭をうかぶるんハ又一人ハ尻をうりておのがむきし心


みくそさたまはる拍子もあくたが物にけりつ如く泡赤坊が
 躍るよひとくふく泡赤念佛こよぶ氣遠念佛躍るも
 いへきあり

この備書係
 十八年印本
 名物鹿子
 巻の中
 又えり

かた婆をや
 只乃喜仁ややゆき

紙
 たるま
 わるの地
 花の

かさいゆり
 葛飾念仏
 虬龍舎兩城自画



竹之丞寺

瀨田問答 曰本所登川通龜戸村自性院略縁起

抑當寺をもと境内は鎮座ある所の稻荷の別當職也然るも
 菅屋町歌音妓狂言太夫元市村竹之丞若年めて太夫元とあり
 幼少より佛をふりて自性院の弟子と成り頼りて天台學をま
 せり廿八九歳のころの狂言ととるありし時つゞ唯自性院の
 通して親族の輩ととる兩度まで出家得度の願いありし故一時
 とちやい妻をむくして世た^{所た}いりたる身とあるは思ひ共もやせん
 練もとも終る水引せり三十三歳のころ又狂ひする斯れこそ
 今佛業ふ入て連も家職の狂言もつゞつゞ其甥^{菅屋町某甥}
 をりし養子とあり大夫元を譲り隠居たりしとぞねうひる
 今親族もともあり是非なき次第と接授する所こそりん

いとき隠居とありやうそ日光法門より内判力をいりて得度を
とげ京都叡山より勤學し終つて終つ法印權大僧
都河關梨の官位をあり叡山の宿坊安住院の任職とあり
夫より後年より及んで江戸に於て先師乃自性院を建て一寺
故に江戸ありむと養育仕つてと内判より出るとあり内判より
とて隠居作付しつるありとて江戸より自性院に入て諸堂
とて再建し或る百姓地を買求めて寺領のとて附屬し終つ
先師入寂以後自性院後任とあり時より日光内判より内判より
ありて上野にもありとて召置割し新宮に法師範まで終つ
つてゆり帰依の人ありて寺中より滅さしむとありとあり執事
たりとも法門より内威光ありとありとありとありとありとあり
ありぬ因て此自性院を以て當寺乃田舎と稱し今以て安住尊師

唱て本像を安置し尊敬を希代の名僧あり寂滅後遺骸を
尚寺本堂の下に葬りて今も其石碑本堂の内安住師本像の
袋戸の内あり其服は養子市村守久也
初名竹々富士見西行乃本像あり
いはぬ竹々通寺と云ふあり

享保のうりし繪



市村竹笠丞

此間、園十郎の画
あれと今史内へ
収載せしむることあ
たふさるるを
省けり

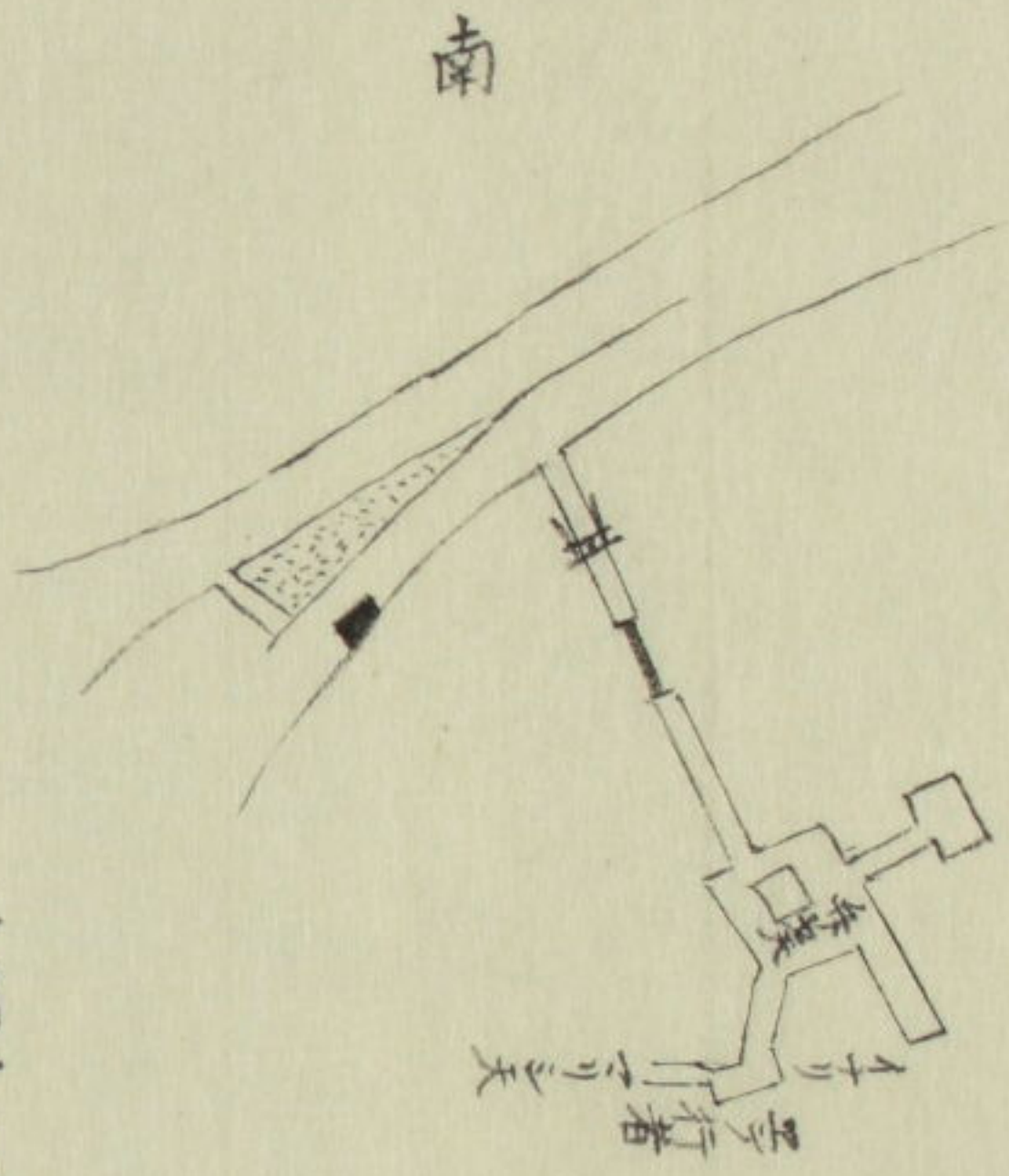
好問堂野威

繪身居清信筆 麟秋屋板元

不忍辨天

上野のふもとと志のりたの池ある辨天の宮を [江戸咄] 巻の二
 曰思ふが国ふうちつきて志のりた池有る池乃廣さ五六町
 四方も有ぬへー夏ハ紅白此蓮花ゆき今一入のかう池池の中
 へ鳩も亦て天乃宮有是を水谷伊勢も奉りて立らるるの
 うら道あつてあてのりぬ糸緒をることあつたりありそ
 後道はきても井もまより此嶋の月乃左の經堂を右の方此中
 へ彼の行者たよ福の行の宮ある摩利支天を也叔くの經藏は
 翁と云道心者乃建立ありし今ある載る面を寛文十一年
 印本江戸繪畫を抄寫して出せりあり案よ此繪畫を [落穂集]
 巻の十日 巖有院様御代酉乃年大火事以後井伊掃部頭左
 保科肥後も左を始を御老中より御書為地大繪畫等りの

あつての不叶事と有り内相致しと云し其後遠近及印と申
 書物を方へ流り板打出来と云と見ゆされこの繪畫を印
 畫印行のちのとき魚一 年号姓名をたよのまゝを見よ



好問堂藏

寛文十一年 遠近道印

霜月吉日

經師加兵衛



今のまゝ蓋と花よりしるは戸咄よりし所の不忠中嶋のみと云ふ
 をんるるり今ハ了崩建立の經藏もあくあまらさる島と
 そのく地震よりこがちてあはる人ごまありあり
 今聖天といふ役の行者あるは是も社乃名さくまはるを
 見てもあつてさそふく今此橋ある方ハくめて西乃
 了より参詣のり舟とてまうてしと見ゆ

自遣往來 一名江 戸往來

印二

曰湖水ヲ稱_ス不忍池_ト中_ニ築_キ一嶋_ヲ被_シ安置_シ辨_ズ天_ヲ參_リ詣_ル
之諸人者解_キ錦纜_ヲ桂_ノ栲_ノ蘭_ノ楫_ノ敲_キ舩_ヲ謠_フ今様_ヲ巨_ク岩_ト松_ト
風岸打波_ノ頻_ニ添_フ颯_々聲_ノ詩人者題_シ池邊_ノ之月_ノ歌人_者
詠_ズ山頭_之花_ニ今_ノ橋_出來_テ社_乃むさまでつりこのとも
や_{たり}と_ん田_{江_ノ土_ノ産}曰_ク不忍池_蓮といへる条_ハ洛陽_ノの比_叡
の_ふり_と湖_水の表_ノと_中の嶋_を築_キ各_賦天_を安_置と_そ
り_と舟_をと_うひ_と今_ノ陸_地よ_つり_びと_らら_ら
よ_りと_らら_らを_渡して根_津湯_石の通_路と_らら_ら系_指乃_ハ
男女_むう_うと_らら_ら十_倍と_らら_らこ_ノ乃_ハ文_也とい_はれ_むと_らら_らけ_れ
ら_らら_らけ_れ後_ハ橋_{あり}と_け渡_しあり_とら_余祖_母あり_と
幼_きら_らの_橋つ_りし_れと_常々_物と_らら_ら

因_ゆこ_レ此_池を_志の_りと_呼事_古涼_記上_野を_志ぶ_が

園とい_はれ_るに_對して_乃名_{あり}と_らら_らとい_はれ_るも
た_らぬ_ひが_こゆ_とあり_と又_{武藏風土記}豊_嶋郡_ノ条_ハ曰_ク篠_輪
輪_津池_貢鯉_鮒鱧_魚鴻_雁鶴_鶴鷺_鴨等_ヲ周_行
十_里許_早日_水不_涸霖_雨不_爲害_祈早_雨人_詣
干_茲所_祭瀬_織津_比咩_也と_らら_らこ_ノ乃_ハ風_土記_{とい}は_れ
る_後世_乃偽_書め_とそ_のこ_レ風_土記_{あり}と_らら_らこ_ゆと_ら
武藏_国あり_とら_ら後_乃世_乃の_とん_田あり_とら_らこ_ゆと_ら
戸_田茂_睦が_との_のあ_と卷_ノ六_雜下_云志_のび_はれ_池め_と
月_をこ_ゆと_ら

月_をこ_ゆと_ら昔_を誰_う志_のり_はれ_池の_ぬあり_と長_きよ_とこ_ら
と_その_池よ_いあり_と志_のり_はれ_池を_志の_りと_らら_らこ_ゆと_ら
池_{あり}と_らら_ら志_のり_はれ_池とい_はれ_る如_文字_を父_と

抄文字を母とて之をそんまぬ文字あり石巻の池あり
 あらたきありとてりあり不共なる字をあらはし例の
 假ありありむうらあひの致ありやふありとてり



江戸の池の景
 池の景この時也

林鹿の花巻之下目次

- 豆府肉乃和菜
- 浄瑠璃ぶ
- 河東娘
- 河東節を鳴ると云事
- 撞木杖
- 豆蔻
- 烟草袋
- 鉢叩賛
- 誓文拂
- ふ

- 浄瑠璃物語
- 三弦
- 河東娘京童
- 長靴のあて飲
- 大神樂
- 烟草を客よむ
- 漆とけ足袋
- 近松門左衛門の法名
- 麴み吉の札
- 綿帽子

麓の花巻下

江戸下谷

好問堂主人著

豆腐ノ紅糸

塚鑑

天和三年
印本

卷の下の名物土産の部曰何国ニモ豆腐ハ有レ凡別

シテ當津ノヲ勝タリト古ヨリ云傳ヘリ紅葉ト云名ヲ加ヘタルコトハ
塚ノ櫻鯛ニモ不劣味ナレバトテ角云トゾ花ニ對スル紅糸ノ縁成
ヘシ又或人云此豆腐ヲ人ノ能クカフヤフニト税テ付タル名共云リ買
様と紅糸と音便成ル故歟今豆腐ノ上ニ紅糸ヲ印ス詞ニ就テ
形ヲ顯ス成ヘシ買用モ通ヒテヨシ此の統ま **国花万葉記** 卷
の五和泉名所にも見へり今江戸でも豆腐の紅糸を法
らうといふらんゆゆゆゆゆ 江戸めて紅糸を印するもいとゆゆ

よりおすつさけりそ六
心る歌め

俳諧當世男

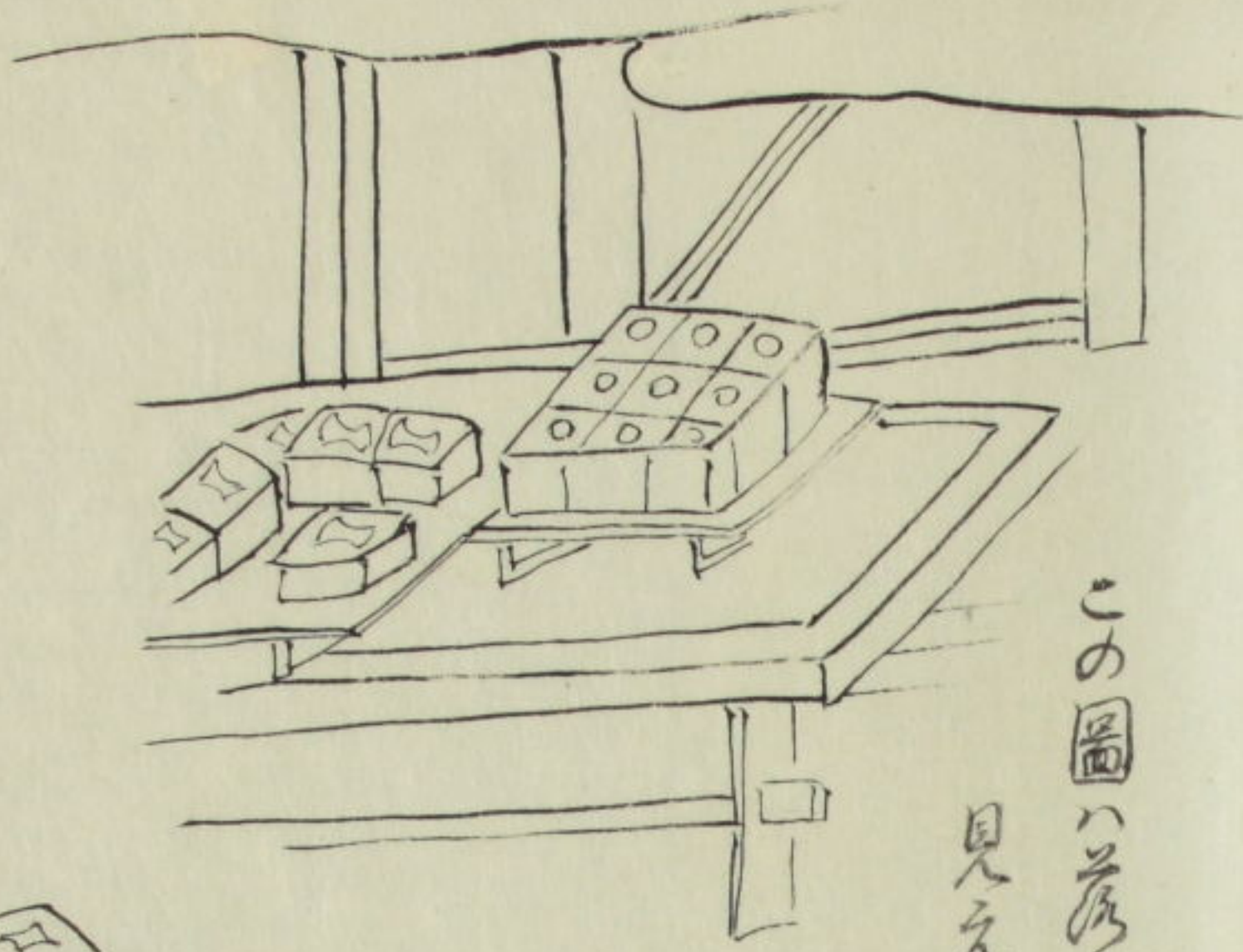
延寶に
年印本

巻の上紅を

朝風や紅ををさそく一巨府肉若

重秀

とんてくほりて延寶の次已に江戸にありをんそく一按ふきの六
く乃物語 巻の上曰ある人寺へ来る長老は漢じてそく一さ
どこれ水素りとそあやうとあひて先づ水茶をんとせよみぢよ
たてまいしそよとおをきららび人笑てゆんそく一そく一あや
そく一がてんひりやそく一そく一一所のまぢとありひ長老さあよ
といせいのあやうたそく一そく一そく一やせおせそく一このく
りの巨府のそめあつうねとも紅葉を流能といふよ昔便
そく一そく一いせたるものあれは塚鑑の説を昔便の説は後よ魚



この圖ハ後首咄よ
見えたるあり



景色二代男
Gawa man

諸國後首咄 巻乃四よ

後首より

そく一ぬやれ豆の喧嘩て
うそでおい一所の尻を
おびやうめさ
とく一秋をのせ
あつらよのそく一
巨府よ分銅をけく
そく一めつしそく一れり
載を

浄瑠璃物語

浄瑠璃物語といふはさうしありこゝ小笠原おはせうといふる女
 房の地あるより——江戸咄 卷の六堺町の条に曰浄瑠璃
 記其いあまりむさしきりのめをゆゑにとうや豊后大岡秀吉
 の御墓極のふ休る小野乃おつうとて拵うめやさしき上らう
 のをうらうそく昔左馬政義刺乃末子牛若丸々ゆ乃東光坊の
 中子と成会那五丸と名をつきおつうとつう十ふ乃歳比妻乃以
 奥列秀平のものとわらうとて金賣吉次信うが家人よまぎれ
 三河國矢橋乃宿長者のりこよのきあひて長が娘の浄瑠璃
 由ちよ忍ひあひあふとをぬれよぬきうこと此を心を十二段よ
 まけてうたふらう——御墓極へさうとられいふく近代世津發繪 卷の
 二小を巻品知化浄を
 女が事法くら茶師乃瑠璃光の纏十二神を象とのり——
 浄瑠璃物語と云ふ見ゆ

古写本浄瑠璃
 物語笛匠の繪

そのすゝを
 抄写す



好問堂三ツ巻



されハ洋瑠璃物語を一名十二段草子とていへり余寛文の迄乃
 印本めて十二段草子とていふとせし三冊のりのをもちり又かよと
 ると物語乃古字本二本及び述々字本一本をおさむ各異同あり
 中よいて違へる天正の字本十六段のつらりものうへ文も
 ことにかがやく書ありよりらんを見れば茶師十二神を象るこいハ
 妾あるとある一

洋瑠璃といふ瓶の

されよける江戸の同一条曰十二段草子とて書ありとて
 御書極へさうとられハ御書極上後まりて減る云々のは
 佐紀屋さうさよ筆せい玉をのぶりて此世のい勢々茶志きぶら
 ままとい小瓶乃かうを程こそあれとてゆうんのあまり大同極の
 市上覧よとあるとせあハ秀吉と云とせあひて是程乃ものを

そのまゝすておうんもをうきりのことて岩松檢校ふしをつけ
よとおちを付られなきハクンげう押を形りき通女ハ他なくハ音
曲の妙もむあーうんによれさいいひめを生れ合ひこそあはく
閑居しそふしを付うり初めくるとありきこれより世は乃産
はくえくうりなきをとよりゆしとそりてまわし次は乃事廣く
ありてまゝ**獨語** 卷の上曰淨よりといふものも三味線と同じ
初なりとやの小聖氏の女三河兵衛作の宿此長者乃女淨よりと
いひしものも十二段の昔語ハ他りしを其頃盲法師これよ
るを付て語り出せしとやハ大中小の系三節と盲目ハ是より
是より三すぢの系をうちて引ふきその色音いぞ多りそれより
三弦よこもむちのえよ三味線とあふいよここれよりしこと
永祿のハ琉球より渡りしとある也よ**松の系** 卷の上ハ琉球組

といふ小歌をのきり是彼國より傳へし時ハ他なる曲ゆし
あつ名はけし形ありしハ大オホ麻ヌサハ二絃つりて後三絃ふしといふ
をあしそハ**菰林伐山故事** 卷之四曲名類曰今之三弦始千元時 小山詞云
三絃玉指双釣。草字題贈玉娥思これゆきもゆきより 三絃器か
るもあはれ魚しまた三味線ハ蒔繪あやをとりことハ近き此の俗と
思ひしふいとふくくんえたるハ**うらまの体** 卷の上曰あはれし
ぞれことぬハ慶長九年の夏乃末まといまやうの三尾線の糖テシふシユ
まるとたしまたし系を調てうんをとりあいのそむせしうらま
あやせせんのかつううあか詞ものうらまの尾ハあや雲井
のり此喜信オトて翅ツバを並ナラべて古フルハサトぬる処を蒔繪よまをそ系う
のたあし日月をあさしうらま白うぬめを形りさしてあはのりりあ
世中のあはれ現ううらまともあともまよりけりてあはればといふ歌を

うなりとて書よりとあるめて降よりづの起り知るべし
降よりといふ名目のいふとてんえたるハ **狂言記** 外み十番
巻の一昆布賣曰今度と上よりぬいようれ **アト** 是もうつて
きませ **▲**こぶりのむ得とつれとんて **▲**んまづ是が三みせん
のらありちぢやとん **紅河原勸進申樂記** 狂言といふもの
記されどこの狂言ハ三線よりたる **んえん** **んえん** **んえん** **んえん** **んえん**
此乃りのとせんたり

三線

右よりいふ外狂言昆布賣は三味せんといふとんえんれがその
ふとく渡もるといふ **護園談餘** 巻の三曰本朝は寛文ノ
比琉球ヨリ傳へたりト **獨語** 巻の上曰慶長乃以とやらん此國は
傳へといふとある説どものむづああると知る **大** **麻**

賴亭曰三味線乃記りを永禄年中は琉球より是を傳へ其時
ハ蛇皮ゆとて二絃ある物あり泉州堺の琵琶法師中小路と
いひちる音目小人ぬとせり **故** 此音目よるこびてある **故**
と伝へるとと教へたふれハ音律のふを **是** を **心** へ **覺** て長谷
の親音 **一** 七 **日** **糸** **籠** **一** 引やう **以** **祈** **一** **あ** **う** **と** **あ** **る** **靈** **夢** **あ**
 る **際** **を** **ら** **る** **時** **は** **又** **尚** **乃** **ち** **た** **る** **み** **の** **都** **乃** **月** **を** **ぞ** **う** **た** **る**
 祇園清水加茂春田とんえん **の** **頃** **め** **を** **い** **と** **知** **つ** **ら** **し** **い** **と**
 く **と** **い** **ふ** **名** **と** **ら** **る** **ゆ** **や** **和漢三才圖會** 巻の十八樂器の部
 ハ **三** **線** **乃** **思** **あり** **名** **と** **ら** **る** **こ** **と** **く** **く** **と** **ら** **る** **見** **え** **ん**

因み云 **蘭亭字原考** 曰弦説文作 **弦** 从弓象絲 **軫** 之
 形會意按 **弦** 从弓 **从** **子** **子** **古文** 糸 **字** 與 **玄** **黃** 之 **玄** 異
 隸或變作 **弦** 漢 **張** **遷** 碑云西門帶 **弦** 右軍蓋用之

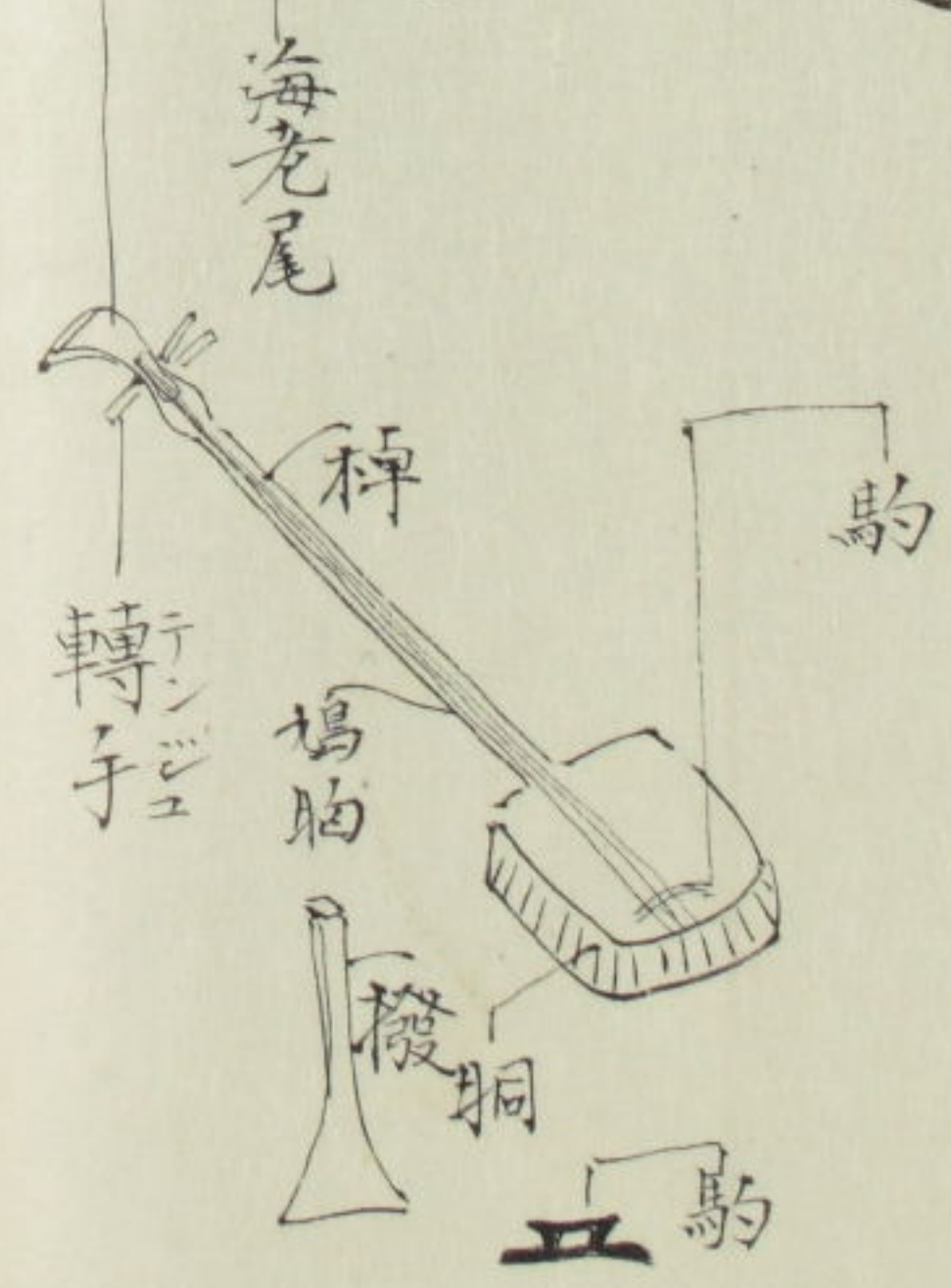
説文別ニ無絃字弦借テ爲絃歌之絃
 としる調ひの一本ニ強と弓ニ从てかきとる
 としる説文の古字を傳へるるこし

養成按よこの説を
 ういおもひは今長唄

この是寛永此初の凡
 乃ものらん白ふち
 柳亭主人木々れ
 〰〰〰〰〰



和漢三才圖會
 一所載



河東節

○十寸見河東の傳ハ 近世奇跡考 卷のあま詳なりきまを
 その河東一代乃傳りて其業を傳りてハ記さん今友人
 平甚ぬの菰本ハ 江戸節根元集 としるりの一冊ありて
 多つてあり今河東菰の条一語を抄を曰く江戸河東節小
 田原町ハ納屋天満屋藤左衛門將及十郎主太夫門中ハ成り
 此者近世乃名人とあり一流語り也 及十郎世とあり納屋
 と外ハ藤り母の屋濱菰ハ菰本ハ在り此名字を河部氏と
 彼家ハ同居せり河部の河乃字ハ及十郎の藤を名り河及
 と呼ぶの字ハ乃字ハ前文有元祖河東中子河及是ハ吉原
 大門外ハ終屋店右馬といふ者ハ二代目河東とあり二妻中子ハ丈
 幸二代目及十郎と改名を此時一流ニッリ刻れ及十郎丈三弦

ありといとも鳥をとりて書きよむせたる余の石花の
ひみちよるべたりよはゆきとていふものこそ音なりいとむが
やくらうひあをりのみあれい **芳葉和歌集** 卷の二十
散位馬史國人の歌は曰尔保栴里能於吉奈我我波半
多延奴等母伎美尔可多良武己等都奇米也母」とい
ふよりいひちりめいとの覺るる **冠辭考** 卷の七日鵬
鵬の水底よ入てさてうみ出てる長く息つきて鳴故息の
長きまめを息長川よはけしあきししよよいし真例の
説をりてたりんばらの曲のいと長たれい鳥をれ息の長き
ふうよをせてあついであきさんいこの芳葉の歌よりあつ
名つりし事あきし

長範のあて歌

毛吹草 卷の二曰ちやうもんあてのそむさうのまうし
あやしる積をのきり今も人の物をあてふあし居るをま
いり **三道明訓抄** 夢碁物語の条に

黒法師 ちよもあり今さかあ先^光の後も
白法師 長のす是もあてのみ 花 足 酒

舞の卒 **鳥帽子折** 曰さてもまのがちうよよりきすらぬ
をたなんしをまの越後信濃はさうひある熊坂ちやう
もん親子六人ごをまあをのがあさうちよりて大まう三
あさうしを大げたいいさきまはけう酒をのま^てこそ
音次がわををのむあさよのめやうたへやむとまうし
うの酒りををま

因る之舞の本乃事物よ見たるハ つれづれ 卷の下ニ曰ク
 久^{ヒサ}脚^ノウチ^ノヲ^シテハ通憲入道舞のゆれ申は奥あることをあつて
 磯の禪司といひける女よ教へて舞をとりて後源光行おろの
 ことをはくはり後鳥羽院の侍也もあり龜菊をくさせまひる
 ととこれこそそのふまを思ふへてまふ世ふ舞といふるのの本の
 ありて舞のゆれあきりのゆれもいれど思ふはあつた
醒睡笑 卷の下曰鳥帽子折をまふこそ心強及ぶく物を
 名をいれといふやらん名いれといふやんとくり返くまふも
 ついよ横笛いであらとあらとありてありて余がわらう
 廿六番あり次く購へる外舞は番とて四十番あり



舞の本鳥帽子折
 よあつてこの
 繪をそのま
 つれづれ

鐘木杖

毛吹草 卷之三 鐘木といふ竹合の杖を出きりあつたその
うゝ鐘木杖といふ名目ありと云ふ今も盲人の勾当檢杖
の法も杖小鐘木ありさんとその名あるもおもはる

因よ云 和名類聚抄 卷之十三 三丁ウオ 僧坊具、部曰漢語抄

鹿杖 和名加勢 都惠 又卷之十四 十九丁オ 旅行具、部横首杖の条

一云鹿杖と見ゆ 牛祭画卷 伴大納言画卷 その外めと見ゆ

このうせ杖のうりて鐘木杖といふ名ハいせきありを
思ふとも横首杖と和名抄は見えたる所を思ひ合を盡し



らの思ふべきま子の類乃うさめ
本より見えたる繪ありをがこい
やまこびとめとあつねと鐘木杖
をうらむるさあその本を考ふる
百二三十年以前に於てのものと見ゆ

美川吉兵衛画本

浮世百人女 といへる物

この繪は 天和元年 印本



大神樂

今よりいづの歴をみる大神樂といふものごとく獅子ま
 といへり **勸進聖歌合** の繪にも獅子舞の息を載る人
倫訓蒙圖彙 卷の七勸進御部にも獅子舞惡魔を拂と
 云あり出た「あゝ」といふおとよみ大神樂の文字も
 まうけど大字の假めて代の字ありその代系代垢離あとの代
 めて神樂のうりよそありいづといふとあり **南嶺子** 卷の
 三曰都鄙ともよ大神樂と号して獅子を舞ある軍あり
 伊勢國吾鞍川より出く諸方を焚くものなり **伊勢系**
ま名新島會 卷の三曰伊勢國桑名郡大夫村桑名の近村あり
 此より代神樂獅子舞六組又三重郡河倉村より六組
 十二組より諸本竈掃ひを故よ大夫村といふ

花洛細見宮
巻の一下載

元禄十
七年



豆蔻

今もや寺あや賑ふ所ふか以豆蔻といふ乞士ありそ
まよりのを曲持めあるハ滑稽者をいひ人の笑ひを催せり
その昔豆蔻といふ名の乞士ありしよりそれハ類ひのりのみ
あの名をおかきたるあり **齋諧俗談** 巻の三曰貞享元禄の以
攝津國みま人の乞士あり名を豆蔻といふ市町よ出て常以
重き物をさうげて強を乞ふと見えたり **諸家除知録** 曰江戸
木挽町小大和慶安と云騷師ありま世間乃人の出入あるハを所公事沙汰
男女婚姻の媒妁あを肝入をこれより人の口入をおかをりのを安とよぶあり
豆蔻のおもむき事
いふハ因よあるを

烟草をりて賓を侍を

烟草此中國に渡りて天正の頃ありてそのころよりこの世に
あま福くりてまやし今めそのひとゆといふどかくまじりのこと

雍州府志

卷之六雜菜部曰近世本朝之流風而家々有來

賓則寒暄談未了中先出烟草盛是於宮火於銅鐵
或磁器是稱火入并棄所吸之渣滓灰燼器并火入
等之物居方盆或圓盆是謂多波古盆まはこ 先はま

一草

寛永二年
卯卯年

一乃書曰たをこといふもの吳國よりこりて

烟ををいあしとよますまてりちあつひも何乃
こくとあつひた客の入来てお伴あつ折ふ一獨ありて
さむしき時あつ用のりあつみ田ま 唐綿 且後水尾天皇
御製の效あまはすむううあつぬともうづりさ人のあつ

あつちとこをあれそのうすぞようひろごを吸ひぬるを

世の人乃心いふようあつんりのめをかくまじりとをりてあを
具ををあつづき異邦乃俗をまねぶあつぬと自ら彼

此あつむきを同ふをともいふ 本草彙言 卷之五

烟草、条曰門吉士曰此藥氣甚辛烈得火然取烟氣吸入
喉中火能禦霜露風雨之寒辟山蟲鬼邪之氣小兒
食此能殺疳積婦人食此能消癥瘕北人日用常客
至即然烟奉之以申其敬如氣滯食滯痰滯飲滯一
切塞凝不通之病吸此即通 ええしり

たむこ袋

たむこの世もあつちをりて中よりあつちをりて人の家より
てと又の孫あつちも持りてちやうはるもあつちをりて

たまことりふりのをいさしめおきていふふりぬゆふ初らうま
つとそりりりその元和寛永乃ふとよ今らうよおせらるるををとて
寛文七年印本
跡追 卷の三
のころ不



この島ハ余ウ所産
土佐繪を押し
屏風ニあり元和
ころのものとる

そのさるをさるへてさそをれより
袋よりれりり思ひたそこ袋を
りり其を次よりせらるるあや免
鏡の繪をりてそのおとむき
あらる

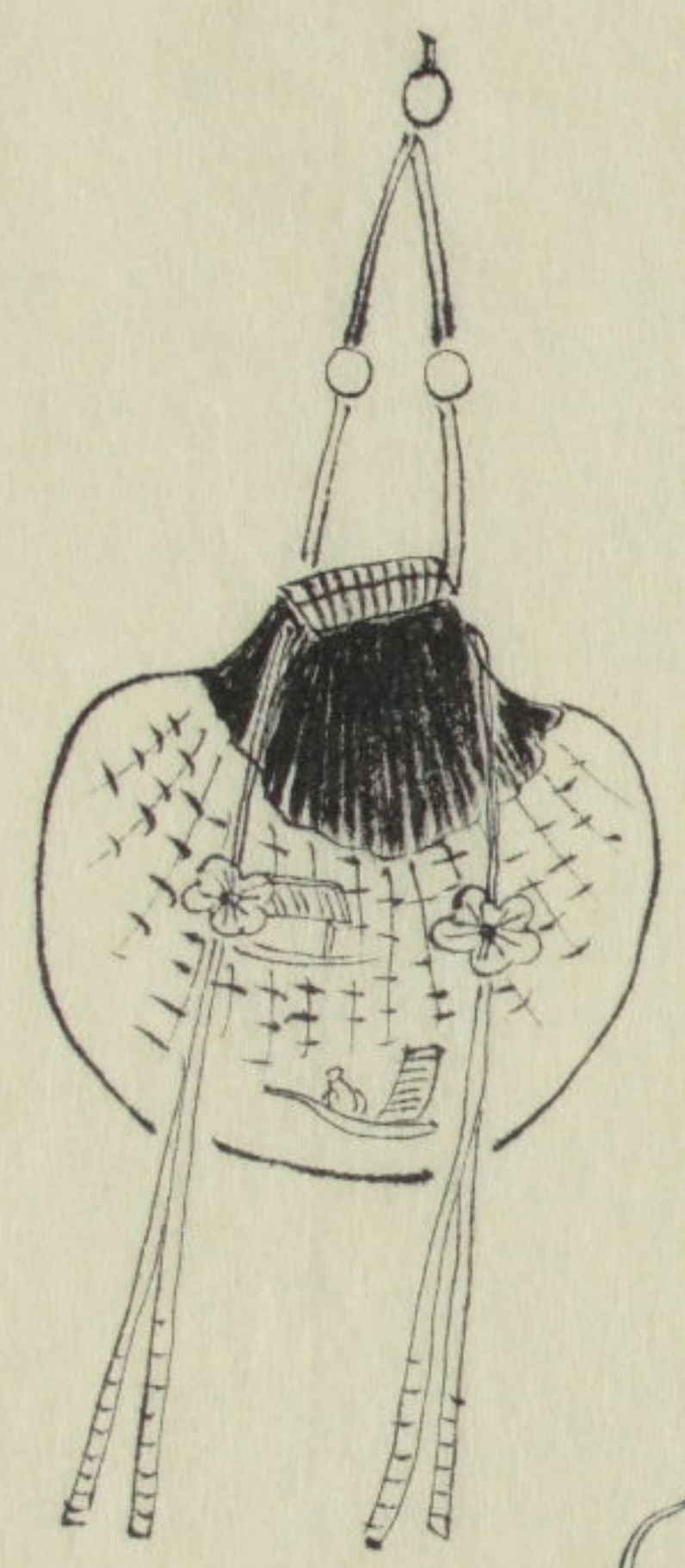
友よのころ漢古たを包の

思いたる彼此おもむきを
同ふまを
示をせ

上木の
年号也
所載也



蒿録 所載漢土
所用蒿包之圖



鳥籠物語

この書字をゆへて百鳥をとり年号なり
されと寛永永を去事きうねとあり鐘あり 曰々藤八角内を
珍藏ありの小坊よりたもと代ありきせつつ火あり乃相里ありの
やうな松吹風よさそりれてあつたんをその色のちつとくう
器よ美をそり 玩弄よ志を失事小ありゆくぞうとて
も一箕子とくしり人よえせたるんよ何とくいその
うとひとたび沖制抄のありしもうぶある事よこそ

深王け足袋

紫革の足袋乃事及び昔も木綿足袋の事も詳ら
小載せし **骨董集** 上編巻の中よええたり深王けた元と
いふ名目いまま人もいふぬバズ一書を記を **宛さま**
寛永二年印本 巻の上曰此頃のうき世つり此若法師受
光廣御跋あり 戒のさういゆとあつてうき此紫の小袖きこつまうり引

まや **依文** 依中依尾 金砂の平帯してきぬり かみ 衣身よまとい深王け
たびよ紫紐細うり乃丸尺巾黄纈纈のきんちやうよ蒔繪梨
地の印籠さげかづのやまと此緒どめして身あり是をゆへ
うり人よりれらわうらん この文うりてくしこいえり
あけきやこれめてそのうき此風俗いやく いよとととく
かまのそり

鉢敲賛

半陶菓 卷之三鉢叩賛曰爲真乎蓬鬢飄蕭 爲
俗床衲勃窣 非俗抑鹿角仙人
之流亞也耶。是空也上人度類
謳之疑 機設漚和者也。吁顔飄屬空
空也已没空不在斯乎哉

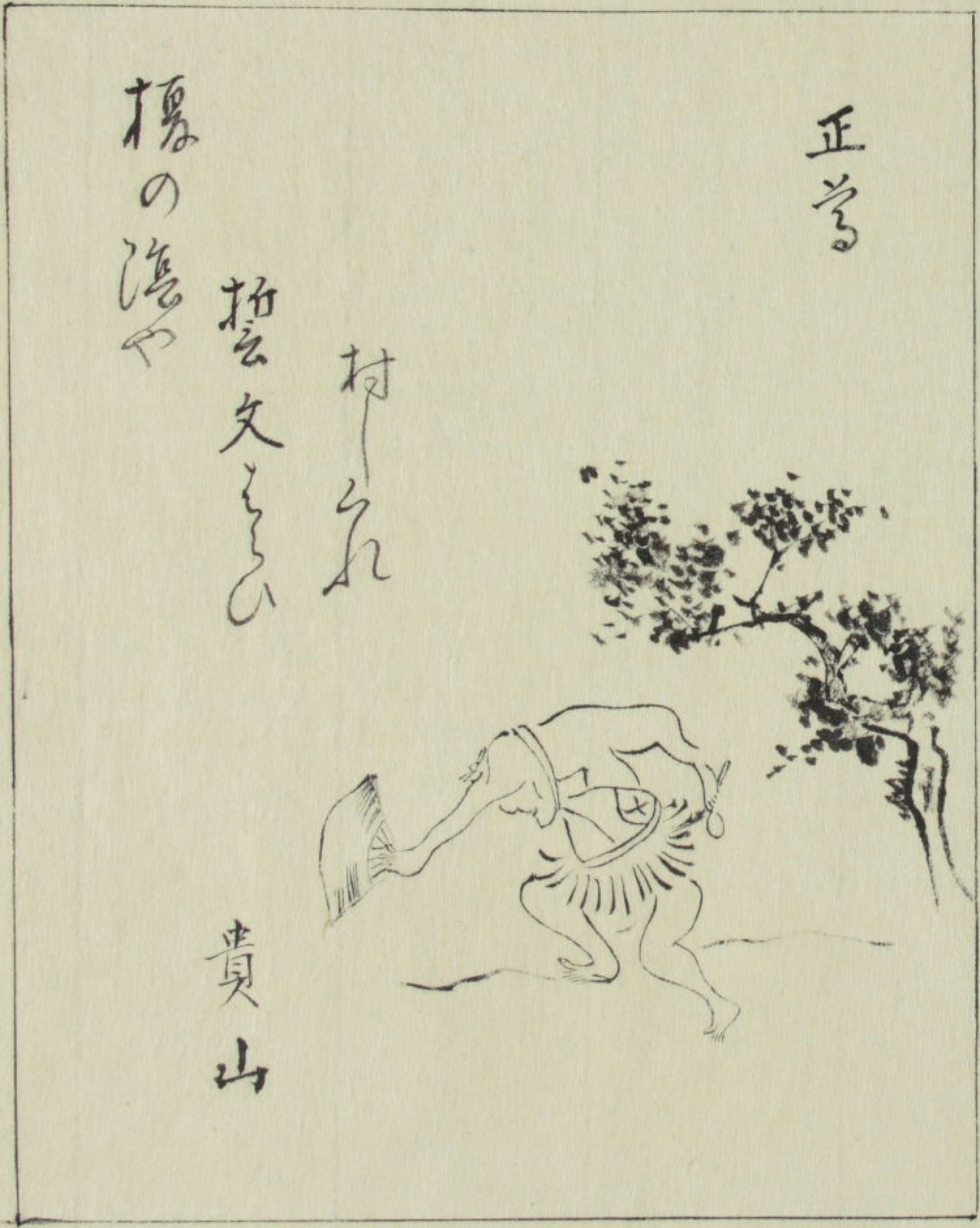


京童 所載

者殿 糸 こんをりてふんハ今物こひ乃かをワざハその罪を犯さ
 人乃代りまもるる心めや伊勢宮川のるりり代りこ
 小児のいぞ物こふあるハ箱根権現の伊社も代系きん
 といふ物こへといふ類 3んみ我あといふん

按ヨ 神社便覧 曰官者殿 京極四糸 鎮舉世 所謂此
 神者誓言文起請救免社也 云々 依此考 則唯一所傳起
 請返 神乎起請文上 書 靈印 以 奉 神供 一七日祭
 之 誠 唯受一流 大事 非 其家 則不傳也 故今本縁
 不 載 之 耳 今世武將 俗云土佐房之靈者 盖 花言哉 乎
 正 純祭之

この島ハ宮子係
 七年平介
 排度曲 是の个
 2ゆのこの本
 謡曲百首を敷
 くと備考とせ
 一各本あり



正當
 村々
 柏玄文
 標の海
 貴山

麴五吉ヶ札

池田勝躬曰麴神社佛閣より千社参り遊してその福所社よりこそ天神宮町と云ふのふきと
しるすこといふ吉あどしるすまをさきまをりれをねるるまをりといふれの時
こころをふかして
麴町入丁自伝其常此法皇の法位ふるをめて廿三所の霊場をれうちめり
と云ふ文字をま
きて麴み吉と云ふいり起れるといり述るるそのおんあを法ぎをりて
一おんあをいり
例一強れ見 天恩孔平といひ一人をりそれは次て麴町と云ふのふきといふ
あれと云ふれりのかれまをりなるるといつれと定めておのがまをり
より今もあき
の由目平まめれをまをりといりその順はそのま平刺しるれめ
及び町名あり
せし中町平二百
大徳馬町平自
かを平一丈
あるは
れをいといと筑つるまといひあ幕り購ふまをりまをりし余
旅初きりをり比叡の伊心より坂幸へりる路乃傍の小社あるを
ゆてえりぬ今なよのすまをりまをり

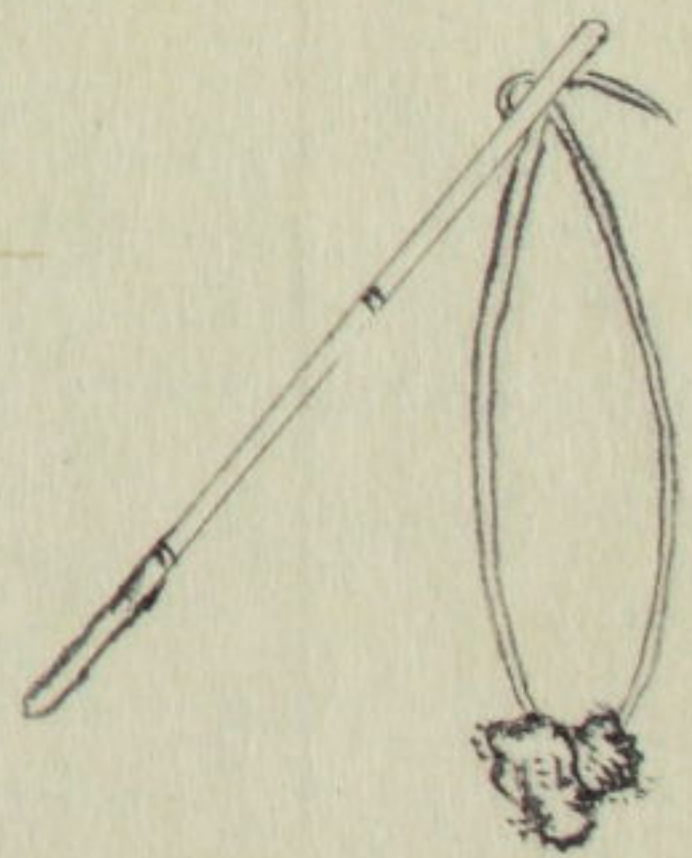
江戸 麴五吉口

好問堂不卷

ふるといふ臺の戯よりとる具

さうとの喜れ持よいうれがかり何屋屋よをとりんとてぬま
いりのをうちけととるあありその糸りて石をらりて
うちうらありおりる老人いそれをふるふんべんとぞ
いふあるこころ 和漢三文圖會 卷之二十一征伐具曰
飄石 飄石今云不柳豆半波以
飛礫豆布天
さのふりづんをいよとあまなるりの戯の具といくとゆえ

よりとらあるりの装う



綿帽子

近き世までもうづり綿帽子といふものなき見え
なると富士御覽記 永享四年の紀 おあーあーあーあーをう
ゆりうせらまきうーゆりてをうてはひこまようちをう
あいて

我あはれを朝まきうのうれぬの緒るしともあはる雪哉

・嫺真居士 山名金吾

雪やこれまきうのうのねいも老きぬ緒るし哉

雅世朝臣 飛鳥井原

富士のねを雪をいこく万代まきうの緒るし哉

古今夷曲集 卷の四冬歌ふ雪を

淡海守宗増

雪よあま雪をいしよらまきうの緒るし哉

尊純法親王

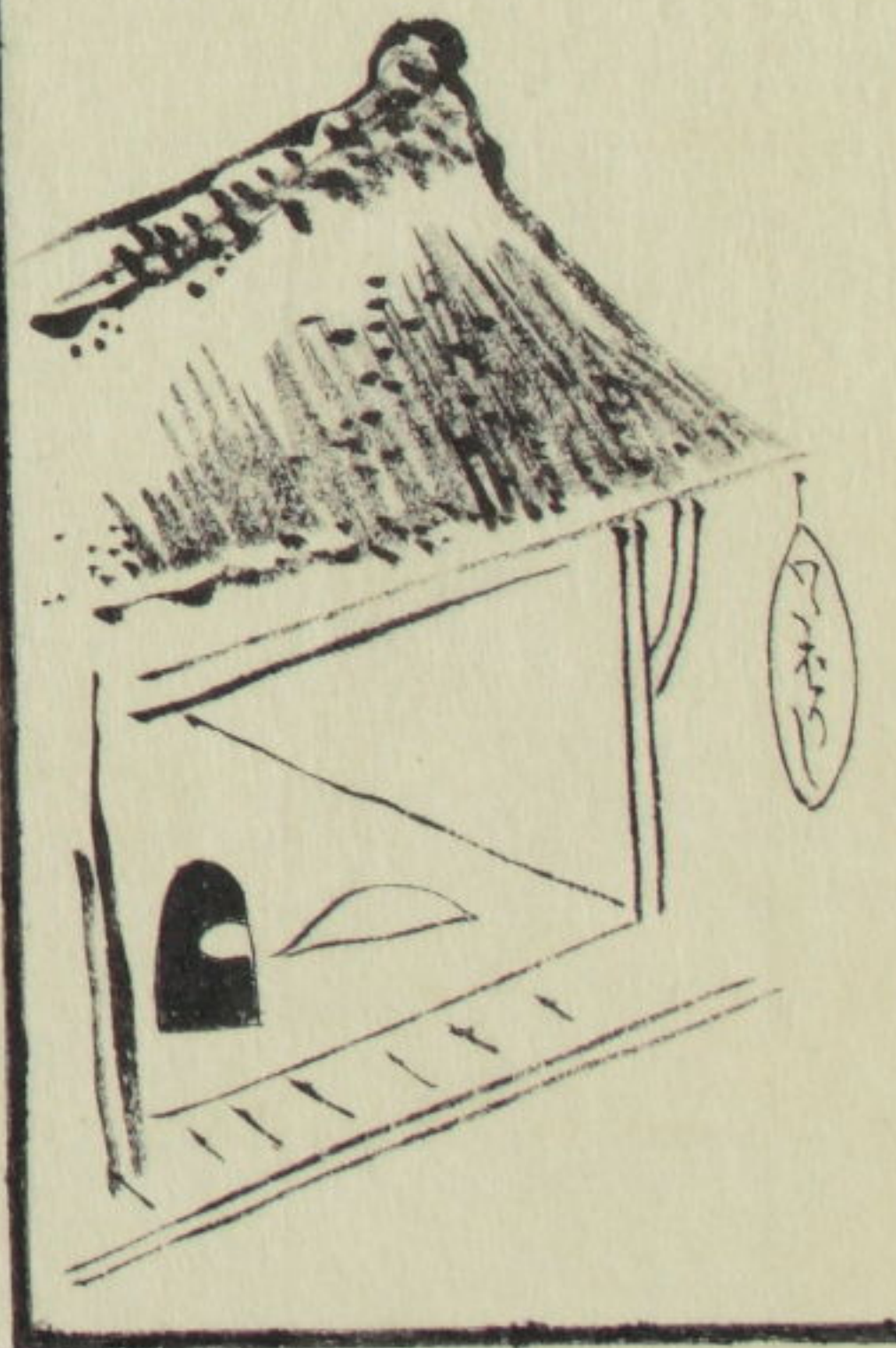
ふふのかいりかき雪の緒るし哉

この綿帽子着板の品ハ
俳諧庭訓往来 卷の下見へり



太夫やうのうらがき 不載

上本の年号外といふ
天和二年の戸本とあり
澄あり



新井お茶 二二

ありしといひうらがき
と解く謎をのそ
され

うらがきといふ
もろありし



骨董集 上編中のきふ

いふ物類 称呼は 終

江戸めててをといひ

いふ把後母を

自をそといふ 海帯のことあり

とあり 醒々これ制化の形よりなる名あり○又ある物に紫の
てをそといふ事又えより 菱川の陰をといふ紫の女紫の
かよりえより 俵を多くえよりけり 是れありし されいふこと

いふこと 海帯をきいて
自酒といふありし 海帯を

貞享元年 不本

武奥列傳 不載

綿帽子



ふろしとともなるのせまに細あらんすゝとよた布の細布といふ
とらひあるし



このつるしは余り見ると二ヶ所
あつては着板をいふ

洛陽寛潤壽

宝永 幸の印本
土佐の本也

此つるし石盤をもぐそをよきとむきびつけるといふ下まで
さゝおろきしとの細といふは前もいふ腰帯れとある鏡
あり後帽子もくわぐの各をうかぎ縁舟とてあやあれど
つるしとの事別考へたはとてそのおむねをいふ

の

尺素往来

卷之上曰鷹師、不論貴賤蘇芳^{カキタ}衫綿、帽子

舟鐺袋

文久三年癸亥十月中澣流覧見一過

活東子

明治二十二年季夏

筆者

妻木頼徳





